効果倍増
わたしの教材活用術

くりかえし漢字ドリル・計算ドリルで学びを育てる

島根県松江市立中央小学校教諭　川上　宜久

一　先輩の言葉の重み

「子どもに魚を与えるよりも、釣り方を教えよ」と、先輩の先生によく言われた。「漢字テストや計算テストの得点を問題にする前に、その子の獲得の仕方を問うてみよ」という意味だろうが、この言葉はあたりまえのように聞こえて、実践はなかなかむずかしい。

漢字テストで80点を取った子に、100点になるまでの居残り学習を課す。これは20点分の魚を与えるように思えるが、私がいつもしていることなので、できれば否定されたくない。それよりも、20点分を補わせる前に、「この子は昨日、どのような学習をして漢字テストに向かったのだろう」と、子どもの学び方を問題にして、さぐろうとする教師はいるだろうか？　そうはいないだろう。大切だとわかっていても、多忙感があるとなかなかできないものである。

でも、居残り学習についてもう一度じっくり考えてみると、100点にして家に帰すこと以上に、「明日は残らなくてもいいようにしっかり勉強してくるんだよ」という意味合いが大きいことに気づく。そう考えると、先輩の言葉がしっくりくる。

居残りで「よっしゃ100点！」と魚を与えただけで帰すのではなく、子どもに釣り方を獲得させようと、学び方についての具体的な声掛けをしたいという気になるのである。「自分の力で100点取れるようにね」という気持ちを込めて。

二　低学年のうちの学び方

［一回よりも二回、二回よりも五回］

書いて覚えることを習慣化させたいが、書くこと自体がむずかしい子がいる。そんな子には、「書けるようになったね」「もう一回書いてみよう」「一ページ書けたのかあ。すごいぞ」というふうに、回数が増えるたびに、「いいぞ、いいぞ」と、自信が深まるような声掛けをしていくことが大切となる。

一方で、ほとんど勉強しなくても100点が平気で取れる子もいる。読書量が豊富で、漢字練習をしなくてもいいような子。外見的には全く問題がないように見えるが、低学年の頃のドリル経験が不足するようであれば、先々、問題となって現れることは明らかである。

このどちらの子どもに対しても、練習回数は多い方が望ましい。

低学年のうちは、宿題を課すときに回数を示すことが多い。たとえ正確に書ける字でも、「宿題…漢字ドリル8ページ十回ずつ」というように、練習回数のノルマを課す。一回ずつ書いて「宿題、やってきました！」と言わせたくないためで、ここには、家庭学習に一定時間以上向かわせたいという教師の願いが込められている。

このように、「一回よりも二回、二回よりも五回」の取り組みは、じっくりとねばり強い学習を獲得させるために大切である。しかも、数多くをこなすということは、スキルにスピードをもたせることにも有効である。

だから、低学年のうちは、たとえ100点を取っていても、練習量がどれほど多いかという視点で、子どもの学びを見ていくように心掛けたいと考える。

三　高学年の学び方

[五回よりも四回、四回よりも三回]

「先生、今日の宿題は何回ずつ書けばいいんですか？」と質問されることがある。高学年ともなると、新出漢字の画数も多く、むずかしくなるので、能率的に学習を進めさせたい。練習回数もできる限り少なくてすむに越したことはない。

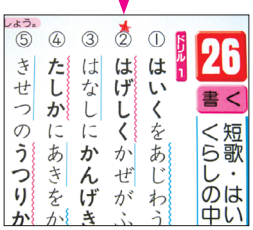
私は、低学年と同様、満点を取った子にも、「どのくらい勉強した？」と問うている。しかしベクトルは正反対。時間や回数をたずね、認めや励ましの声掛けによって、30分よりも20分、十回ずつよりも五回ずつという学びの獲得を期待している。子どもの余力部分を多くしていきたいと願っている。

[書けるようになるまで]

私は、宿題を「漢字ドリルの26ページ①～⑩（書けるようになるまで）」というように出している。ここで言う「書けるようになるまで」というのは、次の日の漢字テストで10点満点が取れるようにということを意味する。能率的に宿題を進めることは大切だが、まずは正しく書けることが優先。テストの点数が悪かった子には、次はどれぐらい練習してテストに臨むかを考えさせたい。練習時間や練習回数を具体的に決めて約束し、それを積み上げることによって、自分の学習リズムを獲得させたいと考えている。

[間違った問題に印をつける。次は印のついているところから勉強する]

間違った問題をノートに書きためていく、「間違いノート」の取り組みはたいへん良い実践だと思う。しかし、これは、点数がなかなか出ない子にとっては、量的にとても辛い作業になってしまうので、私は、取り組んでいない。私の学級では、「テストを返してもらったら、間違った問題に印をつけよう」とだけ約束している。


26
く書　短歌・はいくらしの中
ドリル1
①はいくをあじわう
②はげしくかぜがふ
③はなしにかんげき
④たしかにあきをか
⑤きせつのうつりかしょう。

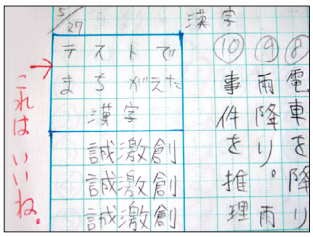
たったこれだけのことだが、これがなかなか全員に定着しない。テストの間違い直しをして満点を早くもらいたいという気持ちになるからなのだろうか。

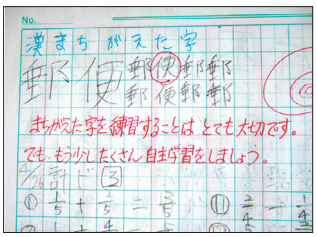
そこで、私は、居残りの時に、ドリルそのものを点検している。「今度練習するときは、印がついている問題からしようね」と一言か

けながら。この印づけがしっかりと定着するまで、点検を続けている。

［一回目のテスト勉強と二回目のテスト勉強の違い］

学期の後半や学年末には、二回目・三回目のドリルテストをしている。一回目のテスト勉強では、①から順に練習していくのが順当だろうが、二回目のテスト勉強では、一回目と同じようにはしてほしくない。弱点をいち早く補強しようとする学習の構えをつくるために、間違ったところをはじめに点検し、その後で通して確認するといった取り組みを定着させたい。将来いっぱい学習しなければいけないときを見通して。

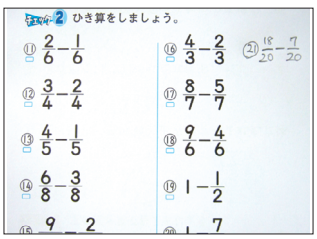




▶2回目のテスト勉強

四　宿題にちょっぴりトッピング

［数値を変えた問題を自作してドリルに書き込む］



これは、余力のある子を意識した活動だが、「計算ドリルの宿題が終わったら、同じような問題をもう一問つくって、ドリルに書き込んでおこう」と、子どもたちに言っている。自分で問題をつくることは、問題の構造の理解を深め、数値を動かして考えることにつながると期待しているからである。

時々、「友だちの問題を解こう」と、自作問題を解き合う時間をとるのだが、これが、けっこうおもしろい。子どもは、わいわい言いながら解き合っている。

〈子どもの感想から〉

○○さんの21番（51の約数をみんな書きましょう）をさせてもらいました。

奇数の問題をするのは苦手な方なんだけど、3でわってみたら17が約数で見つかりました。17が約数になるのは初めてだったので、けっこうびっくりしました。

ぼくも今度、○○さんのようにむずかしい問題をつくってみたいです。

ドリル学習は受け身的にとらえられがちだが、こんなわずかなトッピングで、新たな発見も生まれ、主体的な子どもの動きとも出会えるので、そんな時はとてもうれしくなる。

五　先輩の言葉を胸に刻んで

小さな取り組みだけれど、ほんの少しの心掛け、声掛けで、子どもの学びが変わっていく。そういう意味で、先輩の言葉は、子どもの将来を明るく照らしてくれている。ついつい点数に目を奪われがちな私だが、その前に考えないといけないことをしっかり意識して、これからも実践を積み上げたい。

（22年度までの教材を使った実践例です。）